研究会報告

# 第8回日本気象学会夏期特別セミナー（若手会夏の学校）の報告

第8回若手会夏の学校実行委員会*

標記の企画を1996年8月3日から8月5日まで2泊3日の日程で，京都府北桑田郡京北町の京都府立ゼミナールハウスにて，京都大学が幹事となり開催した．参加者は全国から約120名と，例年以上に規模の大きなものとなった．以下はその報告である．

## 1．経緯と趣旨

「夏の学校」は1990年，若手研究者同士の研究に関する情報交換，勉強，交流のための場として始った．その後，1会場制は限界に達しているとの認識と，より魅力的な夏の学校を目指そうとの趣旨から，前々回より新たな形式が模索され始めた．過去2回では分科会方式による討論会とポスターセッションが採用され，招待講演と並ぶ柱となった．今回はより「勉強」に重点を置き，分科会の枠で討論に代えて講演を企画した．

## 2．日程

初日は午後に集合し，開校式，招待講演1，特別講演，懇親会が行われた．2日目はポスターセッションと分科会方式の「自由講演」，さらに晩に自主企画が催された．3日目は招待講演2が行われ，正午頃に閉校した．午後からはオプションで京都大学超高層電波研究センターが信楽に所有するMUレーダーの見学会が行われた．

## 3．講演と企画

●招待講演（各1時間半）

1．隈　健一（気象庁数値予報課）
「数値予報の現状と将来－現場からの報告－」

数値予報の歴史，データ同化法，数値モデル，気象庁モデルの1996年3月の更新に関する話題などが話された．

2．津田敏隆（京都大学超高層電波研究センター）
「気象学と超高層物理学の接点」

地球磁気圏の概略から説き起こし，観測技術の発展と自身の足跡が話された．

●特別講演（1時間）

安成哲三（筑波大学地球科学系）
「GAMEの目指すところ」

実施直前に決まったため「特別講演」ということになった．GAMEプロジェクトの概略と目標が紹介された．

●自由講演（各50分）

伊賀啓太（東京大学海洋研究所）「不安定問題を直観で理解する」

井出迫義和・山形斉子（日本気象協会）「新しい紫外線情報」

植田宏昭（筑波大学地球科学系）「西太平洋及び南シナ海における夏のモンスーンの季節進行のメカニズム」

勝俣昌己（北海道大学理学部）「リモセンで見える（あるいは見えない）メソスケール対流」

佐藤正樹（埼玉工業大学機械工学科）「ハドレー循環と傾圧波動の相互作用」

高田久美子（東京大学CCSR）「温暖化問題にかかわる気候研究の歩みと今後の展望」

寺尾　徹（京都大学防災研究所）「中緯度の季節内変動とアジアモンスーン」

永尾一平（名古屋大学大気水圏科学研究所）「生物が雲を作ってきたか？－DMSとCCN－」

中村　尚（東京大学理学部）「ブロッキング高気圧の形成過程」

那須野智江（東京大学理学部）「積雲対流はなぜ集団化するか？－CISK理論のこれまでの歩みと今後の展望－」

松岡静樹（北海道大学理学部）「TWISTER－観測と

* 代表：堀之内武（京都大学理学部），他29名（京都大学理学部，京都大学防災研究所，京都大学超高層電波研究センターの大学院生）

© 1997　日本気象学会

は－」

松村寛一郎（三和総合研究所）「アジア環境経済モデル構築に向けた，食糧需給構造の地球環境および社会システムからの見地による分析」

3会場に分かれ，講演各50分，休み時間各10分という「学校」ならではの企画であった．

●ポスターセッション

計29件の発表があり活発な議論が行われた．

●自主企画

東京大学理学部の那須野智江氏主催の積雲対流の組織化に関する討論会と，音楽会が催された．

## 4．おわりに

盛りだくさんな企画であったが，内容が充実しており好評であった．一方で，年々参加者の増大により幹事校の負担が増大しているという問題がある．このような催しを続けるためには，運営の省力化が望まれる．なお，1997年夏に東北大学主催による開催が内定している．

今回の開催にあたり，日本気象学会（講演企画委員会）から補助を受けた．

---

# 訂　正

43巻12月号816ページ，「今年お世話になったレフェリーの方々」の中で，「木村富士雄」を「木村**富士男**」と訂正させていただきます．木村さんにはご迷惑をおかけしたことをおわびするとともに，今後このような事態が生じないよう，編集委員会事務局においては，編集・校正作業になお一層の注意を払うようにいたします．

編集委員長

---